ジャック・オッフェンバック

巴里の生活

LA VIE PARISIENNE

ラ ヴィー パリジェンヌ

財団法人 日本オペレッタ協会

オペレッタ・ルネッサンス

ジャック・オッフェンバックの最高傑作

『巴里(パリ)の生活』

フェルゼンシュタイン版台本による

脚色・演出　寺 崎 裕 則

歓楽の都、巴里を舞台に

恋と欲が交叉する人間模様!!

大人のためのオペレッタ漫画!!

本 邦 初 演 !!

１９９５年5月１６日（火）～２１日（日）

日暮里駅前・日暮里サニーホール

（ホテル・ラングウッド内）

(財)日本オペレッタ協会公演

オペレッタ『巴 里 の 生 活』

LA VIE PARISIENNE(仏) ・ PARISER LEBEN(独)

メイヤック&アレヴィ / 台本

ジャック・オッフェンバック / 作曲

ワルター・フェルゼンシュタイン版による

脚色・演出 寺 崎 裕 則

〔ジャック・オッフェンバックの作品と『巴里の生活』その時代〕

オペレッタの元祖、ジャック・オッフェンバック(1817-1880)は、日本では「天国と地獄」「浅草オペラ」「カンカン踊り」と三大晰的イメージしか知られていませんが、ヨーロッパではオッフェンバックはどのオペラハウスにも欠かせない存在です。

そのヨーロッパでさえ、実はオッフェンバックのすごさ、怖さ、偉大さが分からなかったのです。まァ、とにかくオッフェンバックのオペレッタには“あきる”という言葉、“面白くない”という言葉は一切ありません。楽しくて、面白くて、陽気で、それはまるでカーニヴァルみたいに騒々しくて、エネルギッシュですが、ふと気がつくと世の中や人生への懐疑とメランコリーがひょいと顔をのぞかせます。底抜けに明るいウィットとユーモアで大笑いしているうちに時代をひっくり返すような鋭い風刺が喉ぼとけをきゅんと突き刺します。沸々と煮えたぎるデカダンスからは怪奇と神秘と悪魔（デーモン）の湯気が立上ります。ロッシーニが“シャンゼリーゼのモーツァルト”と称えた、あのこんこんと湧き出る美しいメロディーの中には真の芸術だけがもつ“毒”がたっぷりとしみ込ませてあったのです。そして何よりもいつの時代にも古くならない人間の

本当の姿、人間の本質が、真実がオッフェンバックのオペレッタには描かれているのです。だから、いつの時代にも新鮮で少しも古くならないのです。

こうしたオッフェンバックの真価を再発見し、舞台で実現して見せたのが、寺崎裕則の師、今世紀最大の演出家と称えられたベルリン・コーミッシュオーパーの演出家ワルター・フェルゼンシュタインです。そのきっかけとなつたのが、1937年にチューリッヒのオペラハウスで演出したこの『巴里の生活』だったのです。それはヨーロッパに大きな衝撃を与えました。オッフェンバック再評価の気運が高まり、オッフェンバック・ルネッサンスなるか、と思われましたが、オッフェンバックがユダヤ人であった為、ナチズムの手で葬り去られました。

戦後、フェルゼンシュタインは、根城、コーミッシェオーパーで、『天国と地獄』『ホフマン物語』『青ひげ』『巴里の生活』と次々

にオッフェンバックの代表作を演出、上演、ヨーロッパ中に巡演して、オッフェンバックの本当の姿を知らせました。やがて第２次オッフェンバック・ルネッサンスが興り、今日のようなどのオペラハウスにも欠かせない演目にまで拡がっていったのです。

寺崎裕則は語ります。「私は、1972年、フェルゼンシュタインの『青ひげ』を見て、驚天動地の衝撃をうけ、初めて、オッフェンバックの深さ、怖さ、すごさ、楽しさを知ったのです。２年後、私はフェルゼンシュタインに私淑し、演出助手となり師からオッフェンバツクの真髄を学びました。そしていつか、日本にオッフェンバックのほんとうの姿を伝えよう。それには、オッフェンバック・ルネッサンスのきっかけとなった『巴里の生活』をまず最初に、それもフェルゼンシュタイン版の訳詞、台本で——。23年来の夢がいよいよ実現するのです。！」

オペレッタ『巴里の生活』は、1867年にパリで開かれた万国博覧会で世界中から集まる人々を当てこんで、その前年の10月、初演され、丸１年間もロングランしました。

当時のパリはナポレオン三世の統治する第二帝政時代の頂点といっていい時期でした。第二帝政時代(1850-1870)といえば、フランスの歴史上、最も華やかな栄光の時代だったのです。血のフランス革命も終わり、産業革命で庶民の力が沸き起り、加えて植民地政策の成功で国家は繁栄し、そのエネルギーは革命や戦争に向かうことなく国内に充満し、デカダンスの花を咲かせます。娼婦、金権結婚、黄金万能と三つの“悪の華”が第二帝政の人工庭園に毒々しく咲き誇りました。ボードレールが『悪の華』を、デュマ・フィスが『椿姫』を書いたのもその頃でした。

花の都パリは、もう毎日が日曜日で歓楽の都と化しました。そんな時代の風を一杯に背負って、ナポレオン三世は世界に向かい大芝居を打ったのです。芝居の題名は「パリ万国博覧会」。機を見るに

敏のオッフェンバックはこの好機を逃すわけがありません。今迄は『天国と地獄』や『美わしのエレーヌ』などギリシャ神話を題材に神々の姿を借りて現実の社会を、政治を、人間関係を、男と女を痛烈に諷刺してきましたが、もうそんなまだるこしいことをする必要はありません。オッフェンバックはここで現実の、今、自分たちが生きているパリを存分に諷刺しました。相棒の台本作家メイヤックとアレヴィの二人は、まるで覗きカメラで見るように、克明にスケッチして『巴里の生活』に詰め込みました。

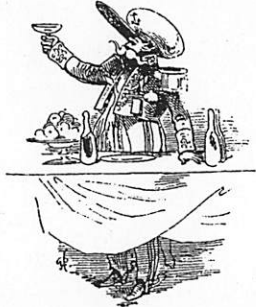
パリの大通り、グラン・ブルヴァールで起り、起るであろう、喧嘩、スリ、掻っ払い、誘惑、ペテン、騙し合い、恋を、不倫を、三角、四角関係を——。オッフェンバックは万国博に酔うパリ、その猥雑さと奔放さを、あけっぴろげに陽気に音楽と踊りで盛り上げ、色と欲がからんで騙し騙される人間たちのおかしさを、愚かさを、賢さを大胆にドラマティックに描いて、その時代を見事に戯画化（カリカテュア）したのです。

偽物と本物。偽物が本物に見え、本物が偽物に見えるこの二重構造、その時は誰も本当のことと信ずる人間。だがその熱がさめた時、

偽物がすべての化粧を落した時、デカダンスの世界のパロディ化、喜劇と悲劇は紙一重、ついこの間起った日本のバブル景気と今日が重なり合います。

〔あらすじ〕

1867年、パリの町。折しもパリ万国博覧会が開催されている。

二人の友人どおしが一人の女性に恋をすると、往々にして友情にひびがはいる。ボビネとギャルドフーの場合もそうであった。二人の希代のプレイボーイは仲たがいする。今や、過去の痛手から立ち直ったと思っていた二人だが、新しいお目当ての相手はまたもや同じ女性であった。その二人の前を崇拝する魅惑的な高級娼婦（＝ドミ・モンド）メテルラは新しい男の腕に掴まって足早に通り過ぎて行く。こんな裏切りにあって、かつての敵対関係も忘れ、友情が復活する。二人は上流社会のご婦人達に目を向け、近づこうとする。ギャルドフーはスウェーデンのゴンドルマルク男爵が若く美貌の妻を伴って現れたと知ると、みずから“観光ガイド”と名乗りを上げ男爵夫妻に憧れのパリを案内し、自宅をグランド・ホテル別館と称し連れてゆく。パリで恋の冒険を夢見るゴンドルマルク男爵は友人からメテルラ宛の紹介状を持ってきた。ギャルドフーは驚き、怒るが男爵をメテルラに紹介する。だが、まだ大きな問題が残されてい

Vignettes by P. Hadol from an 1875 edition of the libretto of *La vie parisienne* (Librairie Illustrée, Paris): the Brazilian arriving at the station; Frick the boot maker and Gabrielle the glove maker; Metella reading the letter from Jean-Stanislas; and the "Swiss admiral" proposing a toast at the party.

た。“グランドホテル”さながらに、当時のしきたりだったおきまりの食卓で、同宿する人たちとおきまりの時間に晩餐会を催さねばならないのだ。“常連のディナー（＝ターブル・ドート）”といえば一応ハイソサエティの晩餐会である。男爵はいろいろ体験したくてたまらないうえ、何でも簡単に信じてしまう男だ。そこで「馬子にも衣装」とギャルドフーは靴屋のフリック、手袋屋のマダムのギャブリエルをはじめ、いかがわしい輩をもっともらしいお客として“常連のディナー”が始まる。彼等のばかげた振る舞いを男爵は「パリ風のエレガント」と解し、しごくご満悦である。

さて、ギャルドフーは何とか男爵夫人をものにしようとする。それには男爵に息つく暇も与えないことである。ボビネは手痛い目に

あい、上流社会の貴婦人を嫌いになったこともあって、ギャルドフーにいたずらを企てる。ボビネは、旅行中の大金持の伯母マダム・カンペール・カラデックの屋敷で男爵の為に“真のパリ上流社会のパーティー”を催し、その間、ギャルドフーが男爵夫人と二人きりになれるよう取り計らう。ボビネは海軍大将に扮し、伯母の小間使いのポーリーヌはその夫人に、その他の召使やフリック、ギャブリエルはそれぞれに侯爵や伯爵令嬢、中国のプリンス、日本の大使夫妻に喜々としてなりきり“上流社会の振る舞い”や“偽りの仮面”をひっぱがし、こけにする。男爵はもう“これぞパリの上流社会”と感動、酔いつぶれる。

一方、ギャルドフーは自宅で、そんな夫の行状もギャルドフーの企みも知らずに、憧れのオペラ座でオペラを見て帰ってくる男爵夫人と蜜の時を過ごそうと待ち受けている。しかしギャルドフーもボビネも、メテルラがかつての恋人に仕返しを目論んでいることは予想もしていなかった。

マダム・カンペールは姪のマドモアゼル・フォレ・ヴェルデュールと旅行先から早目に帰って来て、我が家で行われている“狂宴”に仰天、男爵夫人のいる偽のグランド・ホテル別館へやって来る。フォレ・ヴェルデュールは、男爵夫人とは旧知の仲であり、手紙で男爵夫人のパリ滞在を知っていたのである。こうして、ギャルドフーのデートは水泡に帰する。そればかりか男爵夫人は、偽ガイド、ギャルドフーの正体を暴くメテルラからの手紙を受けとっていた。男爵夫人とマダム・カンペールはここを先途とかき口説くギャルドフーをこけにする。

さらにグランド・ホテル本館で“パリの上流社会の狂宴”を終え、男爵を先頭にご機嫌で帰ってきた一行を待ち受けていたのは男爵夫人の逆襲と、マダム・カンペールのギャルドフーへの落雷！

男爵のパリにおける冒険はまだまだ続く。美しいメテルラに誘わ

れ、男爵は、ブラジルの百万長者の催すカフェ・アングレの大仮面舞踏会に赴く。そこで一同は予期せぬ再会をする。男爵は、ひどい詐欺にあったと怒り、ギャルドフーやボビネと決着をつけようとする。あわや決闘というところで、現れた何やら「ドン・ジョバンニ」の三人の喪のヴェールをつけた女のように、それぞれ胸のすくような仇を討ち、とど男爵夫人は夫の胸に飛び込んでこと無きに終り、ギャルドフーは後悔しながらメテルラとよりを戻し、ボビネはそれを口惜しがりながらなぜかポーリーヌのもとへ、とハッピー・エンド。

すべての真実を知っているマダム・カンペールは、姪のヴェルデールに「これが人生かしら（セ・ラ・ヴィー）！？」と問わず語りに言えば——。

再びカンカンが巻き起こり、ゴンドルマルク男爵夫妻は、歓楽の都パリに美しい思い出を残し、スウェーデンへと帰って行く。

— 幕 —

『巴里の生活』を見て笑う観客(1866年)

〔協会ならではの歌役者と夢を形にするスタッフたち〕

個性溢れる登場人物の多いこのオペレッタ、出演者たちもその個性に負けてはいられない。お上りさんよろしくパリに憧れるスウェーデンからやって来たゴンドルマルク男爵(バリトン)には、今回協会初登場のヴェテラン松尾篤興と、これまた初めて出演のオペレッタ大好きな松本 進 。男爵夫人クリスティーヌ(ソプラノ)には花のある三縄みどり、ウィーン国立歌劇場で活躍、日本では今回が初舞台となる佐々木典子。その男爵夫人を口説くプレイボーイのギャルドフー(テノール)には今やすっかりお馴染になった近藤伸政とこれも初登場のイタリアで大活躍していた黒崎錬太郎。その恋人メテルラ(ソプラノ)にはいずれ菖蒲か杜若の高野久美子と協会初出演の宇佐美瑠璃。ギャルドフーの恋仇でプレイボーイのボビネ(テノール)には久々に登場の三林輝夫と協会最多出演の佐藤一昭が渋い演技を競う。大金持のマダム・カンペール・カラデックには『小鳥売り』で各評論家を絶賛させた木月京子。靴屋のフリックには1年半振りの小栗純一と昨年のジロー・オペラ新人賞を受賞した坂本秀明。手袋屋のマダムのギャブリエルには『小鳥売り』のクリステル役で競演し、オペレッタに水を得た魚のようなソプラノの佐橋美起と山田綾子。ブラジル人には将来のオペレッタ・スターと期待されるテノールの平田孝二。観光ガイドのユルバンには『小鳥売り』で好評の島田啓介。さらに平山智香子、三角枝里桂、坂本教子、村田友里、伊藤 潤 、松本邦裕、葭田 智 らが賑やかに脇を固め、腕達者な歌役者が揃った。

オペレッタは総合芸術である。この『巴里の生活』の舞台を創り、裏で支えるスタッフたち。これまでも、日本オペレッタ協会の公演ではその見事なチームワークで数々のオペレッタの名舞台を生み出してきた。今回も見る人たちを夢の世界へ誘ってくれる。

そんな出演者とスタッフを共に紹介する。

出　演　者

１９９５年５月　16日(火)、18日(木)、20日(土) / 17日(水)、19日(金)21日(日)

役	16日・18日・20日	17日・19日・21日
ゴンドルマルク男爵	松尾篤興	松本　進
男爵夫人クリスティーヌ	三縄みどり	佐々木典子
ラウル・ド・ギャルドフー	近藤伸政	黒崎錬太郎
ボビネ	三林輝夫	佐藤一昭
メテルラ	髙野久美子	宇佐美瑠璃
フリック（靴屋）	小栗純一	坂本秀明
ギャブリエル（手袋屋）	山田綾子	佐橋美起
ブラジル人＝ボンパ・ディ・マタドール	平田孝二（全日）	
ユルバン（ガイド）	島田啓介（全日）	
マダム・カンペール・カラデック	木月京子（全日）	
マドモアゼル・ド・ヴェルテュール	坂本教子（全日）	
ポーリーヌ	平山智香子	三角枝里桂
ルイーズ	村田友里（全日）	
レオニー	日髙ゆかり	清水百合
クララ	前田悦子	柳津みちよ
ゴントラン	伊藤　潤（全日）	
アルフォンス	松本邦裕（全日）	
赤帽プレヴォ	葭田　智（全日）	

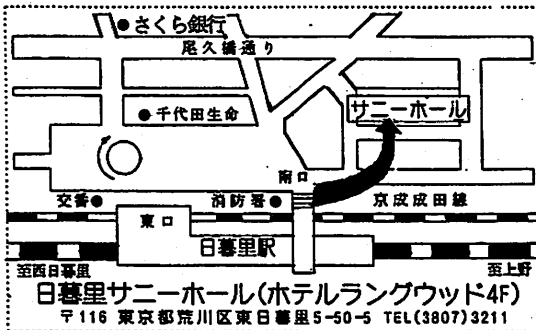
（都合により出演者が変更になる場合もあります。’９５．２．１６現在）

スタッフ

脚色・演出	寺崎裕則	音響	山北史郎
訳詞・編曲	滝　弘太郎	副指揮	髙橋直史
原訳	鈴木芳子	ピアニスト	浜川　潮
音楽監督・指揮	稲田　康	舞台監督	増田明本
ステージング	新井重美	舞台監督助手	米澤建治
〃	藤代暁子	演出助手	岸　京子
美術	川口直次	オーケストラ・インスペクター	榊原　徹
照明	奥畑康夫	舞台制作	舞夢
衣裳	畑野一恵	プロダクション・マネージャー	安河内郁哉
メイク	清水　悌	プロデューサー	清島利典

公演日程

1995年5月16日（火）　午後6時30分開演
17日（水）　午後6時30分開演
18日（木）　午後6時30分開演
19日（金）　午後6時30分開演
20日（土）　午後2時開演
21日（日）　午後2時開演

日暮里サニー・ホールへのご案内

ＪR山手線、ＪR京浜東北線、京成本線「日暮里」駅下車南口より徒歩3分

―― ご予約・お問合せ ――

財団法人　日本オペレッタ協会

TEL 03(3479)1535 ・ FAX 03(3479)1338

ご予約・お問合せ

財団法人　日本オペレッタ協会
TEL 03(3479)1535 ・ FAX 03(3479)1338